

郷土博物館・文学館だより

企画展「新収蔵資料展」開催中!



展示室内写真



安藤士氏追悼コーナー

当館では、毎年前年度に収集した資料を速報的に展示公開する、「新収蔵資料展」を3月24日まで開催しています。今回は来年開催の東京オリンピックを控え、何かと話題となることの多い1964年の東京オリンピック関係の資料をメインに展示を構成しています。その他、新たに発見されたハチ公の写真、22歳の若さで亡くなった写真家「渡辺亀太郎」の大正時代の写真、戦争関係資料、与謝野晶子関係資料、区内で発掘された考古資料などが展示されています。また本展開催が3月にかかるため、収蔵以来20年以上展示の機会がなかった「ひな人形」を初めて公開しています。ひな人形は2組あり、1組は都内に残るのは珍しい江戸時代の「古今びな」、もう1組は、大正・昭和初期に流行した「御殿飾り」という御所をイメージしたひな人形です。

なお、3月8日忠犬ハチ公銅像の制作者である「安藤士(たけし)」氏が亡くなったことが公表されたため、急きょ「追悼コーナー」を設けています。当館の展示などにご尽力頂いた故人のご冥福を心よりお祈り申し上げます。



古今びな



御殿飾り

旧渋谷区総合庁舎と渋谷公会堂

今年の1月15日（火）、渋谷区の新庁舎が完成し業務がスタートしました。みなさんは、もうご来庁いただけただけでしょうか。階数も旧庁舎よりも増えて、まだどの階にどの部署があるかわからないという方も多いのかもしれませんが。

さて、今回はもう懐かしくなった旧渋谷区総合庁舎（旧庁舎）と旧渋谷公会堂（旧公会堂）についてお話しします。

旧庁舎は、現在の場所に今から54年前の昭和40年（1965）の2月に竣工し、その年の4月から業務が始まりました。もともとこの場所は、戦前には陸軍衛戍（えいじゅ）監獄があったところです。衛戍監獄といえば、すぐ二・二六事件を思い起こされたのではないのでしょうか。今も渋谷税事務所近くに慰霊像があり、その名残を留めています。やがて終戦後、ワシントンハイツの一部となりましたが、昭和39年の東京オリンピック開催前、ワシントンハイツは昭和36年10月に返還が決まりました。

ワシントンハイツの跡地は、オリンピックの選手村や国立代々木競技場のほか、新しい渋谷区役所と渋谷公会堂の建築予定地に選ばれました。当時の区役所と公会堂は、神南一丁目の旧電力館のところにあり、そこから移転することとなったのです。

旧庁舎と公会堂の設計は、建築家の高橋武士が設立した「建築モード研究所」が担当しました。高橋武士は広島県出身、日本大学を昭和11年に卒業し、まずA・レーモンドの事務所に就職しています。戦後、東京都建築局に在籍し、西戸山小学校（昭和26）や日比谷図書館（昭和

32）の設計を担当しました。その後、独立して作った会社が建築モード研究所でした。

旧庁舎の特徴は、なんといっても建物の平面形が長方形でなく、緩くカーブした形状をしている点でしょう。また、階段やエレベーターホールなどには、ブルーのタイルをふんだんに使用していたのも特徴的な造りでした。

もう一つの旧渋谷公会堂ですが、公会堂として使用される前に、実は昭和39年の東京オリンピックでウエイトリフティングの会場として使用されていました。終了後、コンサートホールとして改装され、翌年にオープンしています。

昭和40～50年代といえば、テレビでは音楽番組が全盛期の時代で、よく旧公会堂から生放送されていました。またTBSテレビの「8時だよ！全員集合」も、ここで公開録画されていたので、実際に観客席で観た方もいることでしょう。このほかコンサート会場としても、数多くのアーティストたちが演奏を行い、特に「ロックの殿堂」などと呼ばれたこともありました。

現在、新しい渋谷公会堂は建設中です。今年の5月末に竣工、秋にオープンの予定です。これから新たな公会堂の歴史が始まります。



昭和39年 建設途中の渋谷区役所と渋谷公会堂

二ヒルな剣豪・眠狂四郎

岡山県出身の小説家、柴田錬三郎（本名・齋藤錬三郎、1917～1978）が生み出した剣豪・眠狂四郎は、時代小説に登場するキャラクターの中でも、特に強い魅力を持つ主人公であり、のちの剣豪ブームを巻き起こした存在です。

柴田は慶應義塾大学文学部予科三年に在籍時、『三田文学』誌上に「十円紙幣」をペンネームで発表しています。終戦後に堀口大学・井伏鱒二・井上靖などと共に佐藤春夫に師事し、昭和24年（1949）から文筆活動に入りました。27年に「イエスの裔（すえ）」で第26回直木賞を受賞したのち、時代小説を多数発表していきますが、当時はヒット作に恵まれず、不遇の時代を送りました。

しかし31年2月に新潮社から『週刊新潮』が創刊され、5月から「眠狂四郎無頼控」の連載が始まると、柴田は一躍人気作家となりました。毎回読み切りの作品を掲載するという斬新な手法と共に、主人公の人物像が読者の好評を博し、初期の週刊誌人気は大いに盛り上がりました。当シリーズは映画・テレビドラマなどで幾度も映像化されたほか、2000年代以降は漫画や舞台にもなっています。

どこか影を帯びた彫りの深い白皙（はくせき）の容貌、身長六尺の長身瘦躯（そうく）、黒羽二重の着流しを身にまとい、虚無の剣術「円月殺法」を駆使する狂四郎。彼が持つ二ヒルなキャラクター性は、根底に転びバテレン（拷問・迫害によって棄教した宣教師）と日本人を両親に

持つという自身の出自があります。本作品は舞台を文政年間（1818～1831）の江戸末期としています。シーボルト事件が起こった文政11年（1828）がこの年代に当たり、当時の外国人に対する偏見も、作品に影を落としていると考えられます。

作品中で渋谷の土地は、狂四郎が自身で葬った母親の墓と、祖父に当たる楽水楼老人の住まいがある場所として描かれています。また狂四郎が妻と呼ぶただ一人の女性・美保代が眠る土地でもあるため、渋谷は狂四郎にとって縁の深い場所だといえるでしょう。

渋谷は明治時代まで農村的色彩の濃い地域であり、現在の都心としての一面が表れてくるのは大正時代以降でした。『眠狂四郎無頼控』には、渋谷の風景が狂四郎の目を通して描かれています。「東方に、宮益町の町家が、くろぐろとひとかたまりに沈んでいるほかは、見わたすかぎり、樹木と雑草と麦穂が、濃淡に染め分けられていた。十里彼方にかすむ遠山をふちどった広大な平蕪（へいぶ）だった。」「やがて、畑を抜けて、宮益町の裏を過ぎて行くと、御嶽（みたけ）神社の前に出た。」このような描写から、読者は江戸時代の渋谷がどのような土地だったのか想像することができます。



昭和35年（1960）『眠狂四郎無頼控』新潮文庫



収蔵資料紹介

渋谷区庁舎落成記念時計

最大幅 16.9 cm
奥行き 6.5 cm
高さ 11.5 cm

今年の一月十五日、渋谷区役所の新庁舎が完成しました。今回紹介する資料は、昭和十一年（一九三六）、今から二代前の庁舎完成を記念して制作されたゼンマイ式の置時計です。

昭和七年に渋谷町・千駄ヶ谷町・代々幡町が合併して渋谷区が誕生したとき、区庁舎は旧渋谷町役場の建物とされました。しかし現在の氷川区民会館の場所にあったその建物は、新しい区の事務をとるには狭く、また区の中で南に寄った位置にありました。そのため渋谷町は、合併前に区役所用地として現在の渋谷消防署近くに新たな敷地を取得していました。そして区誕生後、一年三カ月をかけて新庁舎の建設工事が行われました。完成した鉄筋コンクリート造り地上三階地下一階の庁舎

は、正面右側の二階・三階部分に公会堂も併設する立派な建物でした。

本資料の時計本体の周囲には、装飾としてその新庁舎の正面が浮き彫りにされています。さらにその後方には、明治神宮の社殿と鳥居が配されており、当時の世相がわかります。時計は記念品として関係者に配布されたものと思われ、当時はこのほかに新庁舎の写真のせた絵はがきも制作されました。

焼夷弾による被災など、戦渦もくぐりぬけてきた庁舎も、昭和四十年、現在の庁舎の敷地に建てられた、前代の庁舎の業務開始によってその役目を終えました。二代前の庁舎の記憶は人々の間から薄れつつありますが、この時計は当時の関係者のよろこびを今に伝えています。

【今後の展示予定】

◆「新収蔵資料展」

平成31年1月29日（火）～3月24日（日）

◆第19回渋谷現代短歌 入選作発表

平成31年4月2日（火）～4月14日（日）

◆写真展 「渋谷川今昔—昭和の初めと

平成の終わりの風景—

平成31年4月20日（土）～6月16日（日）

白根記念

渋谷区郷土博物館・文学館

SHIBUYA FOLK AND LITERARY SHIRANE MEMORIAL MUSEUM

開館時間 ◆ 11:00～17:00（入館は16:30まで）

休館日 ◆ 月曜日（休日の場合はその直後の平日）・年末年始

入館料 ◆ 一般:100円(80円) / 小中学生:50円(40円)

※()内は10名以上の団体料金

※60歳以上の方、障害のある方と付き添いの方は無料

お問い合わせ ◆ 東京都渋谷区東4丁目9-1 TEL:03-3486-2791

郷土博物館・文学館だより vol.40

平成31年3月15日発行